



TITLE:

ウィグルの稱號トゥトゥングとその周邊

AUTHOR(S):

小田, 壽典

CITATION:

小田, 壽典. ウィグルの稱號トゥトゥングとその周邊. 東洋史研究 1987, 46(1): 57-86

ISSUE DATE:

1987-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154188>

RIGHT:

ウイグルの稱號トゥトゥングとその周邊

小 田 壽 典

は し が き

一 稱號トゥトゥングを持つ人びと

二 アタイロトゥトゥングの周邊

三 キイツォロトゥトゥングの息子たち

む す び

は し が き

一〇世紀ころから一四世紀にかけて、中國新疆省の東部天山地方に西ウイグル國を建て、ついでモンゴル・元朝支配下にはいった、中世のウイグル人がどのような佛教用語を使用して社會生活を營んでいたのであるうか。とりわけ東西の混成的文化のうえに成立した社會にあつては、外來用語がどのような意味・内容を持つていたかを見きわめる必要がある。概して外來用語は受容期の用法に拘束され、膠着した意味によつて長く特定の用語となるように思われる。たとえば、トイン toyin (道人) は僧⁽¹⁾ (比丘)、バフシ baxši⁽²⁾ (博士) が師 (Skt. guru) を意味したようにトゥトゥング tutung もまた、中國社會から受容し、ウイグル人の間では佛教徒の一稱號として用いられた。

ウイグル語の tutung は中國語の都統の音寫である。最初に、ミューラー F. W. K. Müller⁽³⁾ (一九〇八) が言及して以來、

tutung の語釋は中國語の都統⁽⁴⁾という官職名を加味して行われてきた。ついでガバイン A. von Gabain 女史(一九六一)は寺院行政への俗權介入を示唆したが、ようやく議論の對象になるのは最近のことで、敦煌の僧官制度の研究の成果によるところが大きい。⁽⁶⁾

シーメ P. Zieme 氏は次のように述べている。「トゥットゥンッ tutung の語は本來官吏の一高位を意味したが、寺院行政にはいり込み、のち第一線級のウィグル人にとって個人名を構成する部分としてみえる。これまでに四〇人ほどの人名に tutung という構成部分を持つことを確かめている。ウィグル語譯者であり、學者の Singgo Sali Tutung や Kuntsin (Kwintswyn) Sali Tutung はもつとも重要な人物たちであるとみてよ」。 ⁽⁷⁾

また、ハミルトン J. Hamilton 氏は第三二回國際アジア・北アフリカ人文科學會議(東京一九八三)で、⁽⁸⁾上記 Singgo Sali Tutung の SLY (sali/sali) を取り擧げて、この長い閒論議を呼び語源不明の稱號が中國語の闍梨(阿闍梨 < Skt. ācārya: 師)に由來するといふ新しい提案を行つたが、翌年 "Les titres sāli et tutung en ouïgour" と題してシエリ sāli について詳論するとともに、⁽⁹⁾tutung (都統)にも言及した。「實際、中國語の稱號、都統は都僧統の略稱された一變形のよう⁽⁹⁾にみえる」といふ、中國本土の北西にあつて中國語の人びとには、佛教徒ヒェラルヒーの長官を示したこの稱號が、一〇世紀の初めころから、同じ意味で tutung の形のもとで、ウィグル語に採用されたと述べる。かつて馮家昇は、北魏の僧官、沙門統(道人統)制度にみえる沙門都統⁽¹⁰⁾からの出自を説いたことがある。また道宣(596—667)撰『續高僧傳』卷九「釋靈裕」の傳には「有敕令立僧官、……爲都統⁽¹²⁾」とあり、高麗・覺訓撰『海東高僧傳』卷一「釋義淵」の傳に「歷跨齊世爲都統、所部僧尼不減二百萬⁽¹³⁾」といふ、さらに藤枝晃教授の研究になる敦煌寫本「牌子曆」(S. 2729)にみえる「都統石惠捷」や「都統康智詮」⁽¹⁴⁾の事例からみると、僧官ないし僧尼の統率者という意味で中國ではかなり一般的に寺院行政に關して都統の語が通用していたようにみえる。そうだとすれば、意味のうえで沙門都統ないし都僧統の省略形として通稱されたとしても、それによってウィグル語へ官職の稱號としてはいったとは斷言できない。とにかくのち、モンゴル・

元朝期には漢文史料に「都通」と書かれることがあった。

ここでは、ウィグル出土文獻、つまり經典寫本の識語や契約證書などの私文書及び寺院公文書にみえるトゥトゥングとその周邊を探り、ウィグル佛教徒社會の一端を考察する。史料制約からモンゴル・元朝期のトゥルファン盆地が主な舞臺であることを、はじめに諒とされたい。

一 稱號トゥトゥングを持つ人びと

ウィグル・漢文獻に現われる *tutung* (都統) はすべて個人名の構成部分である。それが官稱號を意味したか、寺院組織の稱號であったか、佛教徒の間の私的尊稱であったか、あるいは單なる人名の構成部分となつてしまつたか、さほど明らかでない。少なくともある時期には僧侶の尊稱に使われたことは疑いない。もっともそれを端的に示すのは、有名なトゥルファン壁畫題字であらう。⁽¹⁵⁾ ベゼクリク窟院の第九洞にあつた三人の漢人僧の壁畫題字は左から第一番目に「法惠都統之像」“Vapguv Tutung bāg-niṅ iduq kōrki bo ārür” (法惠都統殿の聖像はこれである) とあり、同様に第二番目「進惠都統」“Singuy Tutung bāg” 第三番目「智通都統」“Čitung Tutung bāg” の名稱がある。最近、森安孝夫氏が第三番目の智通を「釋智通」(『宋高僧傳』卷三)⁽¹⁶⁾ に當てるのは、けだし卓見であらう。⁽¹⁷⁾ 第一番目の法惠は漢文獻に同名異人が散見するが、『名僧傳抄』卷一の「高昌仙窟寺法惠」はその傳説的名聲のゆえにもっとも可能性のある人物である。⁽¹⁸⁾ 第二番目の進惠は寡聞にして漢文獻に同名をみないが、奴隸解放文書に相談者として名前がみえる Singuy Tutung bāg は同名の人物である。ウィグル人の間で名聲を博した佛僧だつた可能性を残す。ともかくベゼクリク壁畫に描かれた三人の僧像は同時代の人物を寫實したものではない。三者同一の容姿・装束の類型的僧像へ過去に實在したとみられる僧名を當てはめたのではなからうか。したがつて過去の漢人僧に對する稱號とみるかぎりでは、*tutung* (都統) は尊稱であり、人名の後にくのはウィグル語の語法である。

以下に、*tutung* (都統、都通) を持つ人名を列挙する。なお、固有の人名が漢字に復元されうる可能性を持つものは、實に半数前後に及び、それはもともとウィグル人か漢人かの問題を提起するが、いまはこの課題に立ち入らない。

(一) イナンチートウトウング **Inanč Tutung* (伊難支都統)⁽²⁰⁾。イナンチは、敦煌僧官「沙州宋僧政等」への書簡差出人である。肩書の原文は、森安氏によれば、「賞紫金印校檢廿二城胡漢僧尼事内供奉骨都祿沓密施鳴瓦伊難支都統大德」とあり、この長い稱號の解釋も同氏の分析のとおり、「廿二城」は、マニ教寫本斷片の “*qočo uluṣ ikiu otuz baliq*” (ノーチ⁽²¹⁾ = (高昌) 國二十二市) にあたる。「内供奉」も **Qutluq tapnis ögä* 「骨都祿沓密施鳴瓦」(聖らかな奉仕せる顧問) と對應するとみられ、西ウィグル國の官職名と考えられる。敦煌の都僧統にも相當する僧官であらうか。個人名は *Inanč* であつて、*tutung* (都統) は「大德」に相應しいウィグルの稱號とみなされよう。

(二) シンタコ=シエリ=トウトウング *Singgo Šali Tutung* シンタコは、ビシュバリク人で『金光明經』、『慈恩傳』その他のウィグル譯者であることはよく知られる。人名は、シューメ氏(一九七六)によつて、一四世紀前半(一三四七年)のウィグル折本版本の漢字丁附とともに印刷された「勝光法師」の「勝光」に比定されたが、同氏は同じ人物とみることにはなお慎重のようである。⁽²³⁾ただ稱號 *šali* (閼梨: ハミルトン説) が “*qonim du vapši šali bäg*” [* 觀音奴法師 *Šali bäg*]⁽²⁴⁾ の例からみて「法師」と同程度の意味を持った可能性は大きい。

(三) キュインツイン=シエリ=トウトウング *Küntün (Kuntün) Šali Tutung* キュインツインは、ビシュバリク人で『慈悲道場懺法』(大正四五、一九〇九)のウィグル譯者。譯經の施主名は *ii Ävirniš Alp Qutluq Arslan* (國の向きを直したる勇しき幸ある獅子: 國王の名稱か) の *Ata Ögä* (國舅) 官(殿: *bäg*) のカディル=ハンナ *Qadır Bäs* と(その夫人) ウクリト=テンタリム *Üklit Tängrim* の第三子云々と讀みたい。⁽²⁶⁾ そうだとすれば、譯者は西ウィグル國時代に屬する法師とみられる。人名の讀み *Küntün* (* 玄泉) はシューメ氏の提案である。⁽²⁷⁾

(四) カルン=シエリ=トウトウング *Qarun Šali Tutung* 書寫人。詳しくは不明。⁽²⁸⁾

(五)キタイニシエリ(六)ニトウトウング *Qīlay Šāli(?) Tutung (合台薩哩都通、乞台薩理)⁽²⁹⁾。キタイは、ビシュバリク人で、『根本説一切有部出家授近圓羯磨儀範』(大正四五、一九〇四)及び『根本説一切有部苾芻習學略法』(大正四五、一九〇五)の漢譯者である。元帝師パスバの序文(至元七年一二七〇)に「譯主生緣北庭都護府、解二種音、法詞通辯、諸路釋門總統、合台薩哩都通」(大正四五、九〇五頁上)とあり、『至元錄』序の「弘教大師合台薩里」(大正別卷二、二七九頁)にほかならず、肩書から『元史』卷一三〇(阿魯渾薩理傳)の「乞台薩理」である。『元史』の傳によると、「畏兀人、祖阿台薩理、精佛氏學、生乞台薩理、襲先業通經律論、業既成、師名之曰萬全、至元十二年入爲釋教都總統、拜正議大夫、同知總制院事、加資德大夫、統制使、年七十卒、子三人」とある。⁽³⁰⁾この家に襲名となった「薩理」(šāli)が見掛けのうゑでウィグル口蓋音の šāli と一致しないにしても、別の來源を想定する理由はなさそうにみえる。元朝へ入朝する(至元十二年一二七五)以前の日附を持つ史料の稱號「都通」(tutung)がウィグル佛僧としての尊稱であることを示唆する。以上、人名に šāli の稱號を伴う人物が勝れた學問僧であり、とりわけ乞台薩理が妻子を持つ家産僧であったことは注目されてよい。

(六)シャビニアタニトウトウング Šabi Ata Tutung⁽³¹⁾ シャビニアタは、ウィグル譯寫本『慈悲道場懺法』(上記第三)の供養主で、寫經の時に挿入された施主名である。「われらシャビニアタニトウトウングと(その夫人)ボルティニテンクリム Bolı Tängrim」などとみえる。譯經と同時代ではなく、寫本の正書法は後期を示すようである。なおこのテクストの研究者のヴァルンケ Warnke 夫人は「Novize Ata Tutung」とし、ツィーメ氏も「沙彌の Ata Tutung」と解するが、「沙彌の父都統」の意味にも考えられる。ツィーメ氏「Šabi Ata は固有の名前(通稱?)であって、もし沙彌(šabi)の身分を示すならば、トンガニブカニシャビ Tonga Buga šabi (BM Or. 8212-75A)⁽³²⁾」のように書かれるものと思うが、どうであろうか。

(七)シングツインニトウトウング Singtsuin Tutung⁽³³⁾ 同上經典の寫本供養者。ツィーメ氏によれば漢名は「勝泉」。

(八)チグイニトウトウンゲ *Čiguy Tutung* ⁽³⁴⁾ 同上經典の寫本供養者。ツィーメ氏によれば、漢名は「智慧」。

(九)バンチャクニトウトウンゲ *Bančaq Tutung* ⁽³⁵⁾ 同上經典の寫本供養者。またバチャク *Bačaq Tutung* と読みうる。

(一〇)アンツファンゲニバフシニトウトウンゲ *Antsang Baxšū Tutung* ⁽³⁶⁾ (安藏)。アンツファンゲは、ビシュバリク人で、『四十華嚴』他のウイグル譯者、作詩者。モンゴル・元朝のアリクニブケ、クビライに仕えた(一二九三年没)。詩文に *Antsang qanlīm kāvši* (安藏翰林學士)と見え、元朝下の官職を示すが、見出しの名稱については “*dimz igämz ... iligimz arıy bökä tigin yrlıy-ınga, knü dintar-i kinki boşyutuy bis baliq(-lıy) antsang [b]axši tutung*” (われらが主君、アリクニブケ皇子の命令により、彼の(侍)僧、後學のビシュバリク人、アンツファンク師トウトウンゲ)とある。安藏の傳記はすでに述べたことがあるので、ここでは省略するが、「聞父兄講誦、即了大義」(神道碑、小田 一九八五、一二五頁)といふ佛家に生れ妻子を持った。

(一一)アスィグニトウトウンゲ *Asıy Tutung* ⁽³⁷⁾ 作詩者。プラティヤシリの作詩を撰述するところから元朝時代の人物である。

(一二)チスインニトウトウンゲ *Čisuin Tutung* ⁽³⁸⁾ 作詩者。詩行に *Taydu* (大都)の語がみえるので、やはり元朝下の人物である。ツィーメ氏はこの人名に「智泉」の漢字をあてる。

(一三)サリグニトウトウンゲ *Sarıy Tutung* ⁽⁴⁰⁾ リンクチュンゲの人でタントラのウイグル譯寫本の書寫人である。元朝諸王(西寧王)のアスタイ王子の令旨によって沙州で書寫した(一二三〇年)。

(一四)トインニトウトウンゲ **Toyin Tutung* ⁽⁴¹⁾ (脱印都統)。元朝時代のウイグル語譯者。

(一五)コンイムドゥニトウトウンゲ **Qonımdū Tutung* ⁽⁴²⁾ (觀音奴都統)。トゥルファン出土殘紙漢文・ウイグル文斷片にみえるウイグル譯者。漢文經典寫本の一斷片に、經文の上欄に別字で「觀音奴都統所別譯」と書かれる(表面)。そして裏

面に左から「別譯文之第一帙訖無安爲」(黃文弼の解讀)と一行があり、四行のウイグル文が續く。ウイグル文第一行は“biryk-ning bas cür tügädip” (別譯の初帙はおわって)と讀める。

(一六) トウケルニテミールニトウトウツンク Tükäl Tämür Tu[tung].⁽⁴³⁾ 頭韻詩の書寫人(作者?)で、沙州(šäcu baliq)で、トンガニブカニシャビと分擔して書いたともある。

以上、ウイグル・漢文譯者、作詩者、書寫人は、いうまでもなく佛教經典、佛教詩文學の専門家であり、僧侶の身分に あったと思われる。ところで、僧(Toyin)は、原則としては“ävdin barqün ünüp toyin šmanč bolmıšlar”(家より、財より出て、僧・尼となった)⁽⁴⁴⁾とあるように、出家することであり、また、爲政者の許可を要したことはないが、師僧に就いて學習し佛家の傳統を繼ぐことはもとより、妻子を持つ家産僧が存在したのである。『元史』の「釋老傳」に載るウイグル高僧のプラティヤニシリ(必蘭納識里)⁽⁴⁵⁾が妻のあったことを知る。

要するに、西ウイグル國ではイナンチ、シングコ、キューインツインの場合におけるように、中國語で「大德」や「法師」と稱せられるものがトウトウツンクの稱號を有した。少なくともイナンチは僧官的地位にあった。次に、キタイニシエリ(?)やアンツァングは佛家に生れ師僧につき、モンゴル・元朝期に第一級の僧官、學者僧となった人物であり、この時期にもトウトウツンクがひどく値打の落ちた稱號になつていたとは思われない。いずれにしても僧侶に對する稱號であつて、ウイグル人の間では家産僧の存在は無視できぬものであつたことを注目しなければならない。

二 アタイニトウトウツンクの周邊

ウイグル契約證書などの私文書にみえるトウトウツンクのなかで、アタイニトウトウツンク Atay Tutung は、もっとも注目値する。この人物を取り巻く私的交際關係に興味深いものがあり、山田教授をはじめ先人の研究によつてウイグル佛教徒社會の一面を知りうるので、多少詳しく述べる。

(一七)アタイ＝トゥトゥング Atay Tutung (阿體)。アタイは、いわゆるピントゥング Pintung 関係の四文書に登場する。⁽⁴⁷⁾ 第一文書…アタイ交付の男奴ピントゥング賣價領收書、⁽⁴⁸⁾ 第二文書…アタイ交付の男奴ピントゥング賣渡契約書、⁽⁴⁹⁾ 第三文書…シウサイ交付の男奴ピントゥング解放文書、⁽⁵⁰⁾ 第四文書…男奴ピントゥングの嘆願書。⁽⁵¹⁾ 以上四文書の関係と内容の概略は次のようである。

漢人のピントゥングは幼少のとき、書字・教學を習った。それは、アタイの家で男奴として家内勞働に従う以前からか、アタイの家であつたかどうかは明らかでない。とにかく僧になろうと思つたが、奴隸身分から解放される條件も整わないまま、すでに四十歳に達していた。漢人僧の定惠大師らに相談したところ、現在の「主人」が引き取つて奴隸から解放するという。話がまとまり、定惠大師の法友である漢人のシウサイ大師 (Shi-say T'ang) が九錠の寶鈔を代價にアタイから買い取る事になった。分割拂いされたので支拂完了の日に賣渡契約書 (第二文書) の調印が行われ、アタイは別に九錠の賣價領收書 (第一文書) を書いた。同時に、シウサイは「官民の前で」解放文書を書き、ミンケベギ (千人長) 官の捺印が行われた。その、解放の認可状でもある自由證書 (第三文書) はピントゥングに手渡された。ただし解放の條件はシウサイ (とその夫人) の死後に發效するものであつた。かくしてピントゥングはシウサイに引き取られたが、當面は依然として奴隸身分で「わが主人」に仕えねばならなかつた。その「主人」は自由證書を預かるというので、差し出した。ところがピントゥングが證書のことを訊ねると、主人は「何處かへ置き忘れた」、「ひとに盗まれたか」、「わたしのものをお前は取つた」といい、今になって「私を轉賣する」と言っているようだ。「國王の御名において僧侶となり福德を施せよ」といい、自由證書を交付し、「私」を引き取つて下さつたはずである。宜しく御高配を賜りたい、と、ピントゥングは所轄の官へ嘆願書 (第四文書) を書いたのである。ピントゥングの嘆願書で「わが主人」というのがシウサイ大師であることは間違いない。⁽⁵²⁾ 第一文書の漢文添書では、アタイはこの人物を「大聖都通」と呼んでいる。ただこの嘆願書に日附はなく實際に受理されたかどうかとも全く不明である。他の三文書の日附「龍年第八月二十六日」は、第三文書の末尾の漢文添

書に「庚辰」とみえ、元朝至元一七年（一二八〇）に當ることに、これまで異論はないようである。

第三文書によると、漢人僧のシウサイ（大聖都通）は「コーチョ（高昌）にあるアタイ・トウトウングのところのピントウングと名付ける四十歳の中國男子を、經典を知るゆえ」⁽⁵³⁾に買い取り、「われシウサイ大師に、わが妻に、長子となり、わが家財を管理して行けよ。われらこの後死せば、シンキング・シンイン *Sinking Sin-in*（新恩）を頭とするわが息子らとわが家を執務し訊ね合い相談して行けよ。わが息子らと和合しえざれば、ピントウングはわが家の何某にも束縛されずに自身が上方の山へ下方の砂地へ行くとも四道は自由となれ」⁽⁵⁴⁾とあり、末尾漢文の添書に「庚辰禪捌月念六日給與新恩沙彌善斌收執」⁽⁵⁵⁾といい、新たに陛下の恩恵をえて沙彌となったピントウング（善斌）にこの證書が給付されて彼が收執したことを記す。この文面は、嘆願書に「お前に始から自由證書を與えよう」⁽⁵⁶⁾、「わたしがある（『生存する』）限りわたしに敬い仕えなさい（從來どおり奴隸身分をいう）。それから靜かに居れば、四道は自由となり、思い通りに僧侶となる」⁽⁵⁷⁾とピントウングが「主人」の言葉を引用する内容とまさしく一致する。要するに第三文書の自由證書は上述したように奴隸主シウサイの死後效力を發することをピントウングも承知し、沙彌としてシウサイに仕えることになった。すなわちこの自由證書は事實上遺言狀の意味合いを持ったと思われる。證書の證人として實在の人物でなく、神名も登場することである。すでに山田教授が注目され、同様な文言を、やはり解放文書の一つに見いだしておられる⁽⁵⁸⁾。戸主が重病になって臨終に、家童を解放し手交した自由證書である。おそらく死後の幸福を自ら祈り、佛教徒の功德表現の一つ「放家童從良」にあたる行爲だったに違いない⁽⁵⁹⁾。佛法に歸依する人びとの守護神の四天王や同様な意味を持ったはずの七母天を證人とする必要があったのである。つまり、ピントウングが愁訴した目的は手放した自由證書を取り戻すことにあった。シウサイは「その證書類を何處かへ置き忘れた」⁽⁶²⁾といつて自由證書を反故にしたかったのかも知れない。ここで證書類（*ch'i-ch'ang*）と敢えて複數になっていることが注意される。第一、二文書はシウサイが保管すべきもので、第三文書の自由證書もピントウングから彼が取り上げたものであり、奇しくもこの三通の「證書類」が一括して發見されたことは暗示的である。ピントウ

ング關係文書はコーチヨ（高昌）におけるウイグル人のアタイと漢人大師たちとの交渉を示す具體例の一つでもある。漢人男奴のピントウングは嘆願書のなかで、主人たるシウサイを含む定惠大師らについて、「Tiguy Tayši（定惠大師）を始めとする Qitay（漢人）の大師たち」という。ティグイ Tiguy は、アタイがシウサイへ手交した買價領收書の漢文面に「定惠」とみえる人物にはかならないが、この漢文面はおそらく形式的（ないし公式の）ウイグル文領收證書に加えて、アタイ自身によって代價受領の経緯を記載する必要があったからであらう。⁽⁶⁴⁾ 上端が少し切れて、しかも難解なところもあるが、馮家昇ら（一九五八）によって解讀されたテキストに従い譯解を示すと、おおむね次のようであらうか。⁽⁶⁵⁾

たつ年（一二八〇）八月二十六日に「善斌」（Pitung）の賣買のために支拂われた金錢（鈔）の詳細は以下のとおり。…
 …九日、十一日に支拂われた時、「小于諸」の一家と「引年」・「條六」が證人となった。……「大聖都通」（Siveay Tayši）が「廢床」に連れて行き支拂われた時、「定惠」（Tiguy Tayši）と「宋吾」が證人となった。「當日」（二十六日）「までに」八錠鈔の金錢を手交しおわった。その金錢は「阿體」（Atay Tutung）が受領し持ち去った。一同と母の「伴撒南娘子」はともに「連名で」一筆書いた。なお受領すべき一錠を残し、また「大聖都通」がいくばくかの鈔（紙）を支拂ったが二兩に達せず、「當日」（二十六日）に「兩家」は面會し「殘額を精算し全部で」九錠鈔を「阿體」が受領しおわったので、この書つけを自身の手で書いて記となした。第二文書の賣渡契約證書に賣價九錠鈔の授受が契約證書作成の日附（たつ年八月二十六日）に遲滞なく完了したことを記載しそれが正式な行爲だったようだ。ウイグル人と漢人との間における取引のうち、複雑な金錢授受の経緯があったので、漢文で添書された。このような特異な事情によって、男奴の賣主アタイとその周囲の人的交流が幾分かわかることは僥倖である。これまでに出場した人物で、證人の「定惠」（Tiguy Tayši）と「小于諸」の二人は、別に二つの文書にも見いだされる。

その一は、⁽⁶⁶⁾ 定惠が Sayosi（Sayōši）なる人物へ賣った奴隷と代價取引の完了を示す證文らしく、證文の裏面の右下に漢文で、「定惠取一（？）錠十五兩與我的文字記」（定惠は一？錠十五兩を受取り、われに與えた證文、記す）と、證文の受領

者が添書する。Sayōši (馮：蕭氏と譯す)は、先の「小于諸」ときわめて近い音譯で、また馮家昇(一九六〇)發表のもう一つの文書に Siyosi (Šyōši) Tayši (この文書には漢文面も添書され、「蔡氏大師」とあるという：蕭氏?)とある人物にあたる可能性がある。

以上要するに、アタイ＝トゥトゥンクは「定惠大師を始めとする漢人の大師たち」のシウサイやシャオシ(蕭氏?)などと親近の交際を持った。シウサイは妻子を持つ一方、カウ＝バフシ K(a)u Basai なる人物を師匠・先達と仰ぐ大師であつた。アタイは彼を「大聖都通」と呼ぶが、おそらくウィグル人にそのように通稱された漢人僧だったのであろう。

(一八)トゥルミシュ＝トゥトゥンク Turmis Tutung. 第三文書にアタイとともにシウサイ大師の親族としてみえる。⁽⁶⁸⁾その他、いくつかの私文書にトゥトゥンクを名乗る人物が見いだされる。以下に列挙しておきたい。

(一九)シングイ＝トゥトゥンク Singuy Tutung ⁽⁶⁹⁾進惠). 男奴ブカ＝クリ Buga Quli. 自由證書の相談者。キヨニ＝クズ Kōni Quz という人物が男奴の解放者でシングイ Singuy Tutung bāg と婿のリケに相談して證書を作ったとあり、上記の四天王、七母天を證人とする。兄のブクサンク＝トイン Bugang Toyin の面前でカウシン＝トゥトゥンク Qawsin Tu[tung] が代書した。シングイは、セクリク壁畫の僧名と同じであり、USp 第七四番 (TII D 147a) 施與リストに同名の者がいる。

(二〇)カウシン＝トゥトゥンク Qawsin Tu[tung]. ⁽⁷⁰⁾男奴ブカ＝クリ自由證書の代書人。前記参照。

(二一)ヴァプツォ＝トゥトゥンク Vaptsō Tutung ⁽⁷¹⁾法藏). 施與リストに載る人名。きび借用契約證書の計量桶所有者で代書人。なお Vaptsō Tu (Ry 2734: 山田一九六七、七七一八〇頁) も同名の略稱である。

(二二)トイン＝クリ＝トゥトゥンク Toyin Quli Tutung. ⁽⁷²⁾奴隸賣渡契約證書の代書人。人名は「僧奴」の意味。

(二三)イグナ＝トゥトゥンク Yiqina Tutung. ⁽⁷³⁾銀借用契約證書の代書人。

(二四)オズ＝カナ＝トゥトゥンク Ōz Qana Tu[tung]. ⁽⁷⁴⁾證文の立會人で代書人。

(二五) ヤムチュルニトウトウング Yam-čur Tu⁽⁷⁵⁾[tung]. 銀借用契約證書の代書人。
 (二六) カリムドゥニトウトウング Qarimdu Tutung. ボルミンニ Bolmīs 質子契約證書の代書人。
 (二七) カンプクドゥ (サンブクドゥ?) ニトウトウング Qanbuqdu (Sambuqdu?) Tutung. ボルミンニ 質子契約證書の質主。サンブクドゥと讀んだ方がよいかも知れない。「僧」(toyin) である質子を預った質主も僧身分であったに違いない。

(二八) クルンチュングニトウトウング Qulunčung Tutung. 土地賣渡契約證書の證人。⁽⁷⁸⁾

(二九) ヴアプソニトウトウング Vapso Tu⁽⁷⁹⁾[tung]. 土地賣渡契約證書の買主。

(三〇) サカニアパニトウトウング Saga Apa Tutung. 土地賣渡契約證書(斷片)の買主。⁽⁸⁰⁾

(三一) ビュドウスニトウトウング Büdüs Tutung. フェルト借用契約證書の借主。⁽⁸¹⁾

(三二) カウシドゥ (カイシドゥ?) ニトウトウング Qaysidu (Qaysidu?) Tutung. 銀借用主。⁽⁸²⁾

(三三) スザニケドニカヤニトウトウング Sutzä Kääd Qaya Tutung. 遺言狀の立會人。Sutzä (Sutza) は「首座」のよう

な語が浮かぶが確かではない。

(三四) スザニエドギュニトウトウング Suuza (Sutza?) Ädgü Tutung. 不明。⁽⁸⁴⁾

(三五) シンシニニトウトウング Sintsi Tutung. 不明。⁽⁸⁵⁾

三 キイツォニトウトウングの息子たち

最後に、寺院公文書に關して觸れておきたい。ツィーメ氏によつて發表された寺院免稅證書はたいへん興味深い内容で、トウルファン地方の佛教寺院を取り巻く社會狀況を具體的に示す史料といつてよい。二文書のうがー (Zieme, Text B: T III M 206c) とは、⁽⁸⁶⁾ツィンツォニトウトウング Pintso Tutung とリグニニトウトウング Liguy Tutung 及びハイシキニ

シラヴァンティ *Guytso Silavanti* の三人がこの證書の受領者である。文書の末尾には大きな角印(官印)があり、正式な證書であったことを示す。首部を缺く断片であるが、前任者と思われる尊者(人名缺)の異父兄弟(?)のビンツォとリグイラへムルトウルク阿蘭若處を委ねることを述べる。

(三六)ビンツォ・ヒトウトウング *Pintso Tutung*. ムルトウルク阿蘭若處「住持?」證書の受領者。

(三七)リグイ・ヒトウトウング *Ligy Tutung*. 同上の者。

さて、この文書を「住持」證書とすることは検討課題である。「尊者の後、リグイ *Ligy Tutung* を頭とし、三人がムルトウルク阿蘭若處に常住して、夏多安居し、結制をなし、われらに福德を與え坐住せよ。この阿蘭若處に所屬の土地・葡萄園に、*sazin ayyuci* (宗教監察官)や地方官 (*il begitar*) を始めとし、誰彼も參入させてはならない」という。夏多の結制安居をうたい、ムルトウルク阿蘭若處が安居(修行)僧の道場であったことを窺わせる。次に、もう一つの文書 (*Zieme, Text A*) には、ティツォ *Titso* という人物の名がみえ、マローフ *S. E. Malov* 發表のレニングラード蒐集品の三點 (*URD Nos. 1, 2, 3*) と關連する。後者の三點については山田教授の研究によって文書の性質が明らかにされた。ツィーメ研究のベルリン蒐集品もラドロフ *W. Radloff* (*USp Nos. 83, 88*) によって公表されたものだが、これら五文書はキイツォとその息子ティツォらの生活状況を寫し出す。まず、トウトウングを名乗る人物は以下のとおりである。

(三八)キイツォ (*カイツォ*)・ヒトウトウング *Qiytso (Qaytso) Tutung*. ティツォの實父。

(三九)エルギニル・ヒトウトウング *Älgr Tutung*. ティツォの弟・アンツォ *Antso* 養子契約證書の代書人。

(四〇)ヤクサムドゥ・ヒトウトウング *Yagsandu Tutung*. アンツォ 養子契約證書の立會人。

(四一)アサン・ヒトウトウング *Asan Tutung*. ティツォ 關係受領證書の證人。

次に、五文書の性質は、第一文書：人質文書、第二文書：養子文書、第三文書：養子文書、第四文書：受領書、第五文書：寺院免稅證書(「住持?」證書)である。

キイツォの息子のティツォは三年の契約で質子として、チンツォ *Činto Šilavanti* のもとに預けられた(ツィーメ説、一二二七年)(第一文書)。(成長するに及び)、今度はチンツォ尊者へ養子として賣られた(一二三八年)(第二文書)。(ティツォの實家は貧しかったか、または何かの事情があつて、兄のアンチュク *Ančug* も生活の糧にこたくありさまたつたので、ティツォは相談にのり弟のアンツォを親戚のトイナク *Toynač Šilavanti* に養子として賣り、二十兩の銀を受領した。トイナクにはサンボドゥ *Sambodu* (*三寶⁽⁹⁸⁾奴) という息子がいたが、アンツォをその實子と平等に扱うという契約で、ヤクサムドゥ *Yaksandu Tutung* とバイエケ *Bay Yaka Šilavanti* 及びタイリドゥ *Taylidu Šilavanti* の面前で證人をつけて證文に調印した(一二四一年)(第三文書)。その後、ティツォはシラヴァンティ *Šilavanti* を稱するようになったが、キングズイン *Kingsuin Šilavanti* のところにいる門弟⁽⁹⁹⁾ の七十二人を預かるほどであつた(一二四九年)(第四文書)。(一二五九年、宗主權者のモンゴル朝で憲宗メンゲが急逝した頃まで、ティツォはムルトゥルク蘭若を代表する尊者であつたらしい)。羊の年十二月二十八日附でウィグル王家を通じてこのムルトゥルク蘭若に免税證書がくだされた(第五文書)。(おそらくティツォ尊者が何らかの事情で退任したので、ヴァプツォ *Vaptsio Šilavanti* を頭とするシラヴァンティたちに寺領・莊園(葡萄園)が施與(*lab: Skt. labha*)⁽¹⁰¹⁾とされ、賦役の義務を免除されて、寺院の活動に専念するように敕書を賜つたのである)。

以上、ツィーメ氏の所論に従い、ティツォの經歷を素描してみた。文書の年代比定には二つの前提がある。第一は第三文書の違約罰文言に、「オゴタイ軍には二明駄を獻呈し」(山田 一九七二a、二四二頁引用)⁽¹⁰²⁾とあることにより、この文書が太宗オゴタイ・カンの治世(一二一九—一二四一)の戊年(一二三八)に比定される。第二に、ティツォはチンツォの養子となり、シラヴァンティとして *ayayqa täginlig* (尊者)と稱するに至つた。尊者という稱號は、高位の僧を敬って呼んだ尊稱が寺院組織の地位をも示す稱號として使用されたとみられる⁽¹⁰³⁾。それでは第五文書(*Zieme, Text A: T III M 205; USP No. 88*)のテキストをツィーメ氏の研究にもとづいて紹介しておきたい。この文書の内容をいくつかに區分してみると、

(一) 日附〔第一行〕

(二) 敕書の交付者の關與〔第二一五行〕

(三) 前任者への経過〔第六—九行〕

(四) 敕命の事由〔第二〇—一六行〕

(五) 新任者（後繼者）への委囑〔第一六—二三行〕

(六) 委囑の内容〔第二三—四七行〕

(七) 敕書の授與〔第四七—四八行〕

- (一) 日附は羊の年十二月二十八日が一二六〇年二月十日にあたる。(二) ムルトウルク Murutluk はこの文書の取得地である Murtuk の語源となった阿蘭若處の名稱で、阿蘭若處 (arayan~aryadan) は Skt. aranyātana に由來する。⁽¹⁰⁴⁾ 次にかディル=ビルゲ Qadir Bilgä Tangri ilig qutı が西ウィグル國の阿薩蘭ウィグルないし亦都護 (Iduqut) 王家の系譜に屬するものであることは問題ない。⁽¹⁰⁵⁾ (三) これ以前にティツォ尊者とヴァプツォを頭とするこの阿蘭若處に同様の敕書が下賜されたことを示唆する。(四) 後任者に對し寺領の安堵と閣下（王家）と國・民への祝福に勤めることを約束させる。(五) あらためてヴァプツォ、ドイン、クタドミシユアバ、ノムダシユ、ブヤンチョグを始めとするシラヴァンティたちへ委囑する。(六) 委囑の内容を簡條書すると、
- (イ) 寺領の葡萄園や土地はヴァプツォを始めとするムルトウルクに居住するシラヴァンティ、シェリ saii たちが管理すること。

(ロ) 收益によって阿蘭若處をととのえ、手をいれ、發展を協議し、經營すること。

(ハ) 城市にある寺院 (Skt. vihāra) にいるような上座 (Skt. saṅghasthāvira) シェリ⁽¹⁰⁶⁾となつて、徒食してはならないこと。

(ニ) このシラヴァンティたちが管理し、そのあとも同様で、ここに常住するもの、シラヴァンティとシェリが管理する

こと。

(ホ) 城市や國に居住する衆徒を参加させてはならないこと。

(ヘ) ここに居住するシラヴァンティとシェリたちも今後城市や國に居住してムルトウルク阿蘭若處を管理し、常住するものに干渉してはならないこと。

(ト) 倉庫吏はこの葡萄園から革囊税 (qap birt) 棉花耕地から田租 (tutai) を取り立ててはならないこと。

(チ) 'swlaw (?) 大税 (uluy birtim) の官布 (quampu) ・ 胡麻 (kündi) ・ 棉布 (böz) ・ 葡萄酒 (tor) ・ 衣服 (copra) を始めとし公課 (irt birt) を徴收せず、勞役 (isküç) を課してはならないこと。

(リ) ムルトウルク阿蘭若處に居住するシェリたちへは、城市の周邊から、法衆から、basıy täig・家屋 (税) の羊 (tutun qoyu) ・ 家屋 (税) の牛 (tutun ut) を始めとして、如何なる賦課をもたらしめないこと。

(ヌ) 葡萄園へは渠掘人たちや水見張り人を立ち入らせてはならないこと。また葡萄棚の紐・支柱をも徴收してはならないこと。

そして、(七) それ故にこの tuta turju 敕書をわれらは授與させたもうたという。

この文書は極めて關心をそそる内容であるが、容易に解明しが多いことが多い。まず、宗主権者であるモンゴル爲政者の介入が直接字句に表現されていない。あるいはこれは、一二六〇年というモンゴル政權轉換期の閒隙を縫ってウィグル地方政權が偶然に露出したものであったかも知れない。この文書に官印のないことも關連して今後の課題である。次に、この僧院の構成員を示唆するシラヴァンティ śīlavanti (〜Skt. śīlavati: 持戒⁽¹⁰⁷⁾者) とシェリ sāli⁽¹⁰⁸⁾ の用語である。そしてさまざまな税目が目立つことである。これらの問題は西ウィグル國地域の寺院制度と直結した大きな課題であろう。ここでは、この文書の性質に關して一言觸れるに止めたい。多くの文言が寺院の不輸不入權に言及することから、この文書は寺院免稅證書 (Steuerbefreiungsurkunde) と名付けられたが、最後の tuta turju の意味は必ずしも明らかでない。け

だし明確なことは、寺院住職の交替に際して令書の形式で出された新任（後繼）者への認可状のようにみえる。主権者の側からすれば、寺院・寺領の安堵状であるが、この文書の主旨は、ヴァプツォを頭とするムルトウルクに居住するものに對して、この日からムルトウルク阿蘭若處をして、われらの閣下（ウィグル王家）は主宰せしめ、居住者が寺領の葡萄園・土地を *Tabha* (Skt.: 利養、施與) として取る (*Tab tut*) ことを命令したものである。つまり「寺院居住者が利養する物として取り、常住すること」(*Tab tut* *[tapaṇadīn] tutu*) という意味には取れまいか。⁽¹⁰⁹⁾ いわゆる「住持」(安住護持)の意に近い表現ではないだろうか。一つの提案である。

むすび

以上、ウィグル・漢文獻からトゥットゥング *tutung* を稱する人物とその周邊を探り、ウィグル佛教徒社會の一断面を考察した。ウィグル語の *tutung* が中國語より導入された背景からみて、僧官ないし僧尼の統率者のような高位の僧に對する稱號であつたことは疑いなさそうであるが、しかし中國の僧官制度におけるような官稱號であつたかどうかは疑わしい。そしてモンゴル・元朝期にいたつても同じような高位の僧に對する尊稱でありえた。ウィグル人に身近な漢人僧にも尊稱となつた。また、シラヴァンティやシェリのように寺院組織の稱號らしく使用される事例を認めない。ただ人名の構成部分だけにしかみえないことは、この稱號の定義づけを、殘念ながら不確實のままに止める。なお僧の身分といつても妻子を持つ家産僧がかなり大きな社會的役割を果たしたことを認めなければなるまい。

元朝の功臣、ウィグル人の孟速思(元史二四)について、程鉅夫撰「武都智敏王述德碑」に、「父諱阿里思思、爲本部都統」とある。この都統がウィグル語の *tutung* を解く鍵になると考えたこともある。たまたまガバイン女史發表のトゥルファン出土、人物群の版畫斷片は、⁽¹¹¹⁾ フランケ H. Franke によつて、奇しくも孟速思の一族の人物群であることが突き止められた。⁽¹¹²⁾ 孟速思の父、阿里思思にあたる人物像に「父阿荅荅朵」(阿荅は *Uig. ata*: 父の意味)と名札がある。フラン

ケは荅采を Uig. tutug [都督] の不完全な音譯とみなしたが、tutung ではないえないだろうか。この木版畫斷片には孟速思の孫の世代までみえ、かなり時代が降る。父祖の稱號の痕跡が残ったのである。おそらく經典版本の扉畫で、孟速思一族の如來供養圖といったものであらう。長男は脫因 (Uig. toyin: 僧) と名付けられるなど佛教徒だったことは間違いないが、父の阿里思思の像は、いうまでもなく僧形ではなく、決定的證左に缺けるのである。

註

(1) toyin が「道人」に起源するといふのは、これまでも異論

はなう。(Cf. AGr p. 373a; ED p. 569a; DTS p. 572b).
toyin が僧 (比丘) を意味するといふは “sakinun burxan šazınıtağı ävdin barğıın ümüš toyin šmané šmırti šmınc-lar-nang arıy çaxsaput-ların artatdıız.” (釋迦牟尼佛の法にまづて家より財より出たりて bhikṣu (Skt.: 比丘) bhikṣuni (Skt.: 比丘尼) śrāmaṇera (Skt.: 沙彌) śrāmaṇeri (Skt.: 沙彌尼) などの清く戒律をむねに増加せしむる) [Tekin 1980, 1 Teil, p. 175/176: 174v14—18] などと、またトーン「の Skt. -Uig. テキス」の斷片 (トーン「田中」) に “bhikṣuo: toyin ā” (o Mönch (?) o Mönch!) [Gabain 1954: A19, p. 12] などとある。Cf. Aalto 1957, p. 18, 24 “sizing toyin dıntar bolmıšingiz yıncıuru töpün yıkınır-bız” (なほ僧なりたるは、われらは恭しく敬愛す) [Tekin 1980, op. cit. p. 59: 18v 14—16] などと、また dıntar (< Sgd. dēndār: Elekte im Manichäismus, AGr p. 335) など、僧の尊号と行なはれた。

(2) 『佛祖歷代通載』卷三六「大都妙善寺比丘尼舍藍」の傳

に、皆敬以師禮、稱曰八哈石、北人之稱八哈石、猶漢人之稱師也」とあり、元・程鉅夫撰『程雪樓文集』上、卷八「秦國先墓碑」に、「八哈室者、漢云博士也」(三五五頁) といふ。八哈石、八哈室が baxši の音寫であるといふは、いまやめなう。

(3) Uigurica (I), p. 14 (SEDTF I, p. 14).

(4) USP p. 299: Название Должности; AGr p. 375: Zivil-Gouverneur; DTS p. 593: Название Должности и Tınyz; Caferoğlu, UTS p. 255: Antropomim, Memuriyet adı.

(5) Gabain 1961, p. 79, n. 51.

(6) 茲沙雅章「敦煌の僧官制度」『東方學報』京都三一(一九六二)『中國佛教社會史研究』同朋舍出版一九八二、三二九—四二五頁所收等。

(7) Zieme 1981c, pp. 255—256; Zieme 1980a, p. 206, n. 61: “Tutung ist ein Titel, der (nach einer freundlichen Auskunft von Prof. A. Fujieda) auf chinesisch 都 (僧)

統 *Du (seng) tong* zurückgeht und ein Klosteramt bezeichnet, das dem Abt vergleichbar wäre.”

- (8) Cf. J. Hamilton, À propos de S/SLY en ouïgour, *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa*, Tokyo-Kyoto 1983, I, Tokyo 1984, pp. 338—339.
- (9) *Journal Asiatique* 272 (1984), p. 433—434.
- (10) 馮家昇 一九五三・五頁。贊寧『大宋僧史略』卷中：「沙門都統」大正五四・二二二六・二四三頁。塚本善隆『魏書釋老志の研究』内外印刷 一九六二・四七・二二四頁。湯用彤『漢魏兩晉南北朝佛教史』五二二頁參照。
- (11) 道宣『廣弘明集』卷二四・大正五二・二二〇三・二七二頁中參照。
- (12) 大正五〇・二〇六〇・四九六頁中。
- (13) 大正五〇・二〇六五・一〇一六頁中。
- (14) 藤枝晃『敦煌の僧尼籍』『東方學報』京都一九・一九五九・二九三—二九五頁。竺沙雅章『中國佛教社會史研究』同朋舍 一九八二・三六〇頁參照。
- (15) A. von Le Coq, *Chotscho*, Berlin 1913 (pr. Graz 1979), Tafel 16.
- (16) 大正五〇・二〇六一・七一九頁下。
- (17) 森安 一九八五・五六—五八頁。
- (18) 陳垣撰『釋氏疑年錄總目』二三葉上(〇〇—〇四頁)。
- (19) 本文人名(一九)註(88)參照。
- (20) 資料：敦煌寫本 Pelliot chinois 3672 Bis. 參考：森安 一九八五・三六頁。註(47)。
- (21) 商務印書館編『敦煌遺書總目』北京 一九六二・二九二頁右(三六二—三六三)。
- (22) A. von Le Coq, Türkische Manichaica aus Chotscho III, APAW 22—2 (SEDTF I) p. 40: Nr. 23, Rückseite (6). 森安氏は前註(20)の敦煌寫本 S. 23 の裏に「敦煌と西ウイグル王國——ムハンマムからの書翰と贈り物を中心として——」『東方學』(近刊所收)とあり註(20)に論說がある。參照せよ。
- (23) 資料：T III T. V. 56[a] (SEDTF Faks. IV, Tafel 3; Müller, 1908, p. 14); 王重民 一九五二・四六頁・二三葉裏(〇七) T I D 195 (U 4627) (Hazai 1975, p. 95: 192); T I D 523 (U 2330)5 (Zieme 1976, p. 769). 參考：森安 一九八五・五八—六〇頁。
- (24) Zieme 1985 (BT T XIII), p. 164.
- (25) Müller 1910, p. 81: 7—69.
- (26) 資料：T I Ks. 12 (U 935) (Rührborn 1971, Tafel VII, p. 20/21: 108—118); T II M 12—848 (U 2769) etc. (Warnke 1978, p. 6, 43, n. 26). 參考：Zieme 1981a, pp. 93—94; Zieme 1981c, p. 241, n. 43.
- (27) 原文 T II M 12—848 (U 2769): Warnke 1978, p. 43, n. 26, Recto 2—5: (ȳānā) il ȳvrimis alp qutuy ȳrsian ata ügä bāg [qadir baš-ni[n]g] ükilt tngim-ning, učunū oyli oy[ul] kütägü qū[tadmīs] bās öz inanc totuq bāg-ning ögi [qanğı bo] iki qutuy-lar ücün ävrtgäli ötümis ö[tügingä]. Cf. Zieme 1981a, p. 93: “... auf Bitten des

- Qutadmiš Baš Öz İnanç Totoq Bäg, des dritten Sohnes und Schwiegersohnes von İl Ävirmiş Alp Qutluy Arslan Ata Ügä Bäg Qadir Baš und Üklit Tegrin übersetzt hat." 安部健夫『西ウイグル國史の研究』彙文堂書店 一九五五・三四四頁参照。
- (27) Zieme 1981c, p. 241, n. 43.
- (28) 資料：T I x 543 (Ch/U 7479) : Zieme 1981c, p. 251.
- (29) 資料：上記 大正四五・一九〇四・九〇五頁、及び一九〇五・九一五頁。參考：『至元錄』大正別卷二・二五・一七九頁。『元史』卷二二〇、阿魯渾薩理傳。百濟・小田 一九八三・一九五頁。
- (30) また『佛祖歷代通載』卷二五の「敕賜乞台薩理神道碑銘」には「早受淨圖法於全末利可吾坡地沙」とみえる。
- (31) 資料：T II M 12—22 (U 2710) etc. : Warnke 1978, p. 61 (248) etc. Cf. Zieme 1981a, p. 93.
- (32) BM Or. 8212—75A : 羽田亨 一九二五（一九五八・一六九頁）。庄垣内 一九七六（一九八二・九頁）。Cf. Warnke 1978, p. 44, n. 27; Zieme 1980a, p. 208, n. 61.
- (33) 資料：Mainz 304 : Zieme 1981a, p. 93.
- (34) 資料：U 2593 : Zieme 1981a, p. 93.
- (35) 資料：U 3059 : Zieme 1981a, p. 93.
- (36) 資料：吉川小一郎將來寫眞。參考：百濟・小田 一九八三・一九三一—一九五頁。森安 一九八三・小田 一九八五・一一一—一二七頁。
- (37) 資料：Arat 1965, ETs No. 15, pp. 160—161. 參考：百濟
- 一九八五。
- (38) 資料：Arat 1965, ETs No. 12, pp. 124—125.
- (39) Zieme 1985 (BTt XIII), p. 178; 49. 90n.
- (40) 資料：敦煌將來 Or. 8212 (109) : Zieme・Kara 1979, p. 162 (1009), p. 329 (46b). 參考：羽田亨 一九二五（一九五八・一六二—一六三頁）。
- (41) 資料：『至元錄』大正別卷二・二五・一七九頁。
- (42) 資料：黃文弼『吐魯番考古記』圖版二・二九頁。參考：馮家昇 一九五三・五頁。「觀音奴」のウイグル語の音寫については人名(二)・註(24)参照。
- (43) 資料：BM Or. 8212—75A, ch. XIX, 001a. 參考：羽田亨 一九二五（一九五八・一六九頁）。庄垣内正弘 一九七六（一九八二・九頁、六八—六九頁）。なお、切り離された口は *tutung* の省略とみられる。註(68)参照。
- (44) Tekin 1980, I, Teil, p. 144.
- (45) 『元史』本紀卷二六（六右—一三）に「（至順三年四月乙丑の條）國師必刺忒納失里沙津愛護持不軌、……伏誅、仍籍其家以必刺忒納失里沙津愛護持妻丑丑」とある。百濟 一九八五参照。また『元史』本紀卷七（五右八）に「（至元七年）九月庚子、敕僧道・也里可溫、有家室、不持戒律者、占籍爲民」。『元史』本紀卷三二（一九左二）に「（天曆元年十月）、敕天下僧道、有妻者、皆令爲民」とあり、家産・妻子を持つ僧侶の存在を裏書きする。
- (46) シーメ氏は「Dass *Tutung* dann aber auch (sekundär) in Personennamen vorkommen konnte, deren Träger

nicht den Stand eines *tutung* innehaben, zeigt die von den Novizen (*šabi*) *Ata Tutung* in Autrag gegebene Abschrift des *Cibei daochang chanfa* [慈悲道場懺法：筆者註]” (1980a, p. 208, n. 61) ㄅㄛㄣˊㄣˊ ㄅㄛㄣˊ ㄣˊ
“Or, l'emploi extrêmement fréquent du titre *tutung* en turc ancien, attribué parfois même à des novices, donne à penser que ce titre tendait à se dévaluer considérablement chez les Ouïgours—processus qui implique, lui aussi, un délai plus ou moins long.” (1984, p. 435) ㄅㄛㄣˊ ㄅㄛㄣˊ ㄣˊ
つて、ツィーメ氏とはほぼ同じ意見のようであるけれども、*Šabi Ata Tutung* を沙彌の身分と考えることには賛成でない。本文人名(六)参照。

- (47) 第四文書はマロフ S. E. Malov がウルムチ(一九一三年)で入手し寫眞を附けて解讀・ロシア語譯を最初に公表した(PDP pp. 201—204)。これを除く三文書は中國の西北文物考察隊(一九五三年)によってトタルフアンから將來されたが、もと高昌城址(カラホージョ)で發見されたものという。これらは、捷尼舍夫(З. Тенишев)・馮家昇(一九五八)によって新發見の文書として、上記第四文書の再解讀を附録して發表された。また馮家昇らは、若干の修正を行い、ロシア語でも公表した(一九六〇)。山田教授(一九六九)は三文書を再検討し重要な訂正をなし、とくに第三文書の性質について解放文書であることを突き止めた。うち二文書(第二、三文書)は別に奴隸文書關係の研究に收録した(一九七二a)。その後第三文書の一部についてリゲティ, L. Ligeti

の提案があり、さらに耿世民(一九七八)は第三文書を原文書に依據して検討を加え、再度別に發表した(一九八二)。一方山田教授も第三文書の改訂研究を行い第四文書の一部に言及した(一九八一)。なお第三文書は梅村氏の研究に引用され、第四文書は別にアダムス B. S. Adams(一九六八)が言語學的注解を行ったほか、クラーク L. V. Clark(一九七五)、カラ・シヤーメ G. Kara-P. Zieme(一九七二)、ツィーメ P. Zieme(一九八五)などによって部分的に關說されている。山田教授と耿世民氏との間には異論があり、また第四文書の讀解はまだ不完全であるにしても、歴史資料としての利用が可能になったのである。

- (48) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八。Фэн-Тенишев 1960, 山田 一九六九 (Feng Pint No. 1)。
(49) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八。Фэн-Тенишев 1960, 山田 一九六九、一九七二a (Feng Pint No. 2)。
(50) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八。Фэн-Тенишев 1960, 山田 (Yamada) 一九六九、一九七二a、一九八一 (Feng Pint No. 3)。梅村 一九七二a。耿世民 一九七八、一九八一。
(51) マロフ (Malov 1951: PDP No. 1)。捷尼舍夫・馮家昇 一九五八。アダムス Adams (一九六八)。第四文書三二行 *kängläšip*, “расширяться, шуметь” (PDP p. 393a)。“擴大”(捷尼舍夫・馮家昇 一九五八、一一八頁)はアダムス (Adams 1968, p. 62, n. 16)も疑問視する。前後の文脈からすれば、「仲違いしている」の意味で、「漢語「嫌忌」の動詞化語であるかも知れない。文脈の讀みとり方を除け

ば、不明語はこの一語である。

- (52) 捷尼舍夫・馮家昇 (一九五八、一一九頁) が定惠大師を「主人」とするのは、「回鶻文定惠實奴契」(馮家昇 一九六〇)の誤讀によるもので、耿世民 (一九七八、一九八一)の再解讀によって問題は解消された。山田教授も愁訴された奴隸主はシウサイ大師とする(山田 一九八一、三八三頁)。
- (53) 第三文書八行：捷尼舍夫・馮家昇 (一九五八、二三頁)は“qinīy yaš-īy” (結實的年青的) (一一五頁)と讀んだが、耿世民の“qinīy yaš-īy” (四十歳) が正しい。
- (54) 第三文書一〇行：“gīlāp āgīrāp”の讀みを訂正し、“gīlāp asīrāp”とした(耿世民 一九七八、四五頁、一九八一、二七八頁)を採りたい。
- (55) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八、圖版三參照。
- (56) 第四文書二三行：burunča は「始めから、あらかじめ」の意味。Cf. Adams 1968.
- (57) 第四文書一五行：“song qalsar”を訂正し、“silk qalsar”とする山田教授 (一九六九、二二二頁、一九八一、三八二頁)の讀みに従う。
- (58) Ramstedt 1940, No. 2: 山田 一九七二a、一八二—一八三頁。
- (59) 土肥義和、敦煌講座3『敦煌の社會』(池田溫編)、大東出版社 一九八〇、三五六頁。
- (60) “tört maxarāč tängriār” (四天王: Skt. catvāro-mahā-rājānaḥ) 中村元『佛敎語大辭典』上、五二七頁參照。
- (61) “yiti ākā baltūz tairimār (tängrimār)” (七母天: Skt. sapta-mātṛi) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八、一一四—一二五頁。『望月佛敎大辭典』二、一九二五頁、七母天參照。
- (62) 第四文書二四行。
- (63) 捷尼舍夫・馮家昇 一九五八、一一九頁。
- (64) 山田 一九六九、二〇三頁(八三)參照。
- (65) 山田 一九六九、二〇二頁(八二)參照。また、この漢文の解釋には名古屋大學文學部東洋史學研究室並びに同じく敎養部助敎授津田芳郎氏のご助言を得たことを記して感謝の意を表す。
- (66) 『新疆出土文物』(北京、文物出版社 一九七五)の圖版二〇〇(二三八頁)「回鶻文定惠實奴契」がそれで、馮家昇 (一九六〇: 第一文書)、耿世民 (一九七八、一九八一)の解讀が發表されている。わたしは次のように讀む。

- 1 Iuu yīl toquz-unč ay tört
- 2 yangīqa mn tīguy tayši āngūr
- 3 -ning šayoši-qa samıš qul
- 4 -ning yol-ınta šayoši bilā
- 5 yarašıp šayoši-qa yoc birip
- 6 kitdim sayın buqa-tın öz
- 7 -kyä. kımın mǎ čam čarınqa
- 8 kalsār mn tīguy tayši
- 9 bilımn tanuq tangut buqa mn
- 10 tīguy tayši bitidim

龍年九月初四

日にわれ定惠大師はエンギン

の蕭氏に賣渡した奴隷に關して蕭氏と合意し

蕭氏へ「残り」なく支拂い

終った。「奴」サインツピカから

自ら、誰からも異議申し立てに

來れば、われ定惠大師が

知る。證人タングートツピカ。

われ定惠大師が書いた。

- (67) 馮家昇發表の圖版寫眞はほとんど讀み取りえないが、「蔡氏」と解讀された文字は「蕭氏」の崩し字體ではあるまいか。そうであるならば、小千諸 (xiao yu zhu) [第一文書] Sayosi Sayosi [馮家昇 一九六〇「第一文書」] Siosi Sayosi 蕭氏 (xiao shi) [馮家昇 一九六〇「第二文書」] は同一人物の音寫で、本來の漢人名は蕭氏ではないか。

- (68) 資料：捷尼舍夫・馮家昇 一九五八、圖版三。參考：山田 一九八一、三七七頁。Zieme 1980a, p. 214, n. 95.

- (69) 資料：Ramstedt 1940 (2), pp. 6-7: 山田 一九七二 (一五) 一五〇-一五二頁。Zieme 1981c, p. 249.

- (70) 資料：Ramstedt 1940 (2), pp. 6-7: 山田 一九七二 (一五) 一五〇-一五二頁。

- (71) 資料：USp No. 74 (T II D 147a): Zieme 1981c, p. 249.

- (72) 資料：3 Kr. 38 (USp No. 110): 山田 一九七二 (一五) 一〇八-一一二頁。

- (73) 資料：TM 222, D 51 (USp No. 52): 山田 一九七五、四三三-四二九頁 (挿圖 9c)。

- (74) 資料：Ramstedt 1940 (1). Cf. Zieme, p. 190, n. 14.

- (75) 資料：USp No. 47: 山田 一九七五、四二六-四二七頁 (挿圖 9)。

- (76) 資料：USp No. 51, Tafel 2: 山田 一九七二、四七九-四九九頁。

- (77) 資料：USp No. 51, Tafel 2: 山田 一九七二、四九七-四九九頁。

- (78) 資料：T III M 205 (U 3908): Zieme 1974b Abb. 1, pp. 295-308.

- (79) 資料：『吐蕃番考古記』圖版一〇四、一一〇頁：護 六三、七一三-七一四頁。USp No. 118 (3 Kr. 30a).

- (80) 資料：Ry 1097b: 山田 一九六七、圖版三、八〇-八二頁。

- (81) 資料：T II Čiqim No. 2: USp No. 63: 山田 一九六五、一〇〇-一〇二頁。

- (82) 資料：USp No. 113 (3 Kr. 33).

- (83) 資料：T II Čiqim 5 (USp No. 78): Arat 1964, pp. 62-63, Plate 4.1 (p. 72): 梅村 一九七七、四八五-四八七頁。

- (84) 資料：T II 604 (U 2477) + T II 637 (U 2505) r5a: Zieme 1985 (BT T XIII), p. 182, n. 53-1.

- (85) 資料：T I T 301 (U 2378), Zieme 1981a, p. 85.

- (86) Zieme 1981c, pp. 254-258.

- (87) シー・ツ氏 (1981c, p. 255) の解釋に従ふ。

- (88) i gaḥ (ཀམ་ཁ་) < i ga (ཀམ་) < i ya, i: ḡ (cf. ED 41a)

はウィグル文獻では比較的後期のものにみえるので、これら官吏はモンゴル元朝・チャガタイ後王家に關すると考える。

- (88) 資料: SJ O/54: URD No. 1, 山田 一九七二^a, 五〇〇
一五〇二頁。 SJ O/70: URD No. 2, 山田 一九七二^a,
二四二—二四五頁。

- (90) 資料: SJ O/55: URD No. 3, 山田 一九七二^a, 二四六
—二四九頁。

- (91) 資料: SJ O/55: URD No. 3, 山田 一九七二^a, 二四六
—二四九頁。

- (92) 資料: T II D 373a (U 5250) (USp No. 83); T II D
373b (U 5249) (USp No. 84): Zieme 1981c, p. 241, 248.
Tafel XIX.

- (93) Malov 1932 (URD No. 1), 江上波夫 一九三八、山田
一九七二^a (1) 参照。

- (94) Malov 1932 (URD No. 2), 江上 一九三八、山田 一
九七二^a (三) 梅村 一九七七^a 参照。

- (95) Malov 1932 (URD No. 3), 江上 一九三八、山田 一
九七二^a (四) 参照。

- (96) Zieme 1981c 参照。

- (97) Zieme 1981c 参照。

- (98) 『元史』や『遼史』には佛教用語に「奴」を附けた人名が
頻出する(田村實造編『元史語彙集成』一九六一、若城久治
郎編『遼史考』一九七九参照)。なかゝ Qayimtu (Qayimdu;
cf. Zieme 1980a, p. 208, n. 61), Tayingdu (Zieme 1978,
p. 83) は慎重に扱う必要がある。

- (99) シーメ氏は“kür(?)”と“kürig” (Junge, Sch-
tler) と讀み替える可能性を追求しよう。 Cf. Zieme
1981c, p. 248, n. 64; p. 251 (Z. 21).

- (100) この受領書は「鶏年、第四月十八(日)に Kingsuın Šila

[vanti] の ᠠᠶᠢᠭᠠ ᠰᠢᠯᠠ (11c) の kür(?) / kürig

(「第c」) を私 Tiso Šila[vanti] に受領した。證人 Asan

Tutung. このタヤガは私 Tiso Šilavanti の ᠲᠢᠰᠤ ᠰᠢᠯᠠᠪᠠᠨᠲᠤ に

あつた。また出土記號 [T II D 373b] (Dakiaussahr: 高昌

故城發見) から同一場所發見の、同一日附ぎ同一證人の受領

書がある。「鶏年、第四月十八(日)に Murtut 寺院に(所

屬のc) Qoınıš 尊者が殘した ᠲᠠᠭᠠᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠰᠢᠯᠠ (廢所の ᠤᠯᠤᠰ) と

(ᠠᠶᠢᠭᠠ ᠰᠢᠯᠠ) Kingsuın Šila (c) の ᠠᠶᠢᠭᠠ ᠰᠢᠯᠠ と

同様の古く式服を私た ᠲᠤᠶᠢᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠰᠢᠯᠠ , Kamsuın

Šila には受領した。證人 Asan Tutung なりである。この

二通の受領書は Kingsuın Šilavanti が自分に所屬した

ものを處分したのに對し交付された受領書であつたのであ

らう。Kingsuın が一括して保管していたに違ひない。なか

ゝシーメ氏は後者の文書を次の ᠠᠶᠢᠭᠠ ᠰᠢᠯᠠ と譯す。“Die (von)

dem zum Murtut-Vihāra (gehörenden) Ayayqa Tagimling

Qoınıš abgelegten Decken und Bettstellen, eine alte

Decke (und) ein altes Gewand (von) Kingsuın Šila

haben wir, Toyin Qulr Šila (und) Kamsuın Šila,

empfangen.” 私は多少讀みかねたが確實ではない。また、
この Murtut-Vihāra へ送付文書等とみえる Murtutug 圖
若處で同一寺院と考へることを排除すべきではないと考へ

う。とちかく兩受領書と Murutlug 阿蘭若處との關係が、うへに明らかなうと難識である。Cf. Zieme 1981c, pp. 241—243.

- (101) 中村元『佛教語大辭典』東京書籍 一九七五、一四二—一頁。
Zieme 1979, Uigurisch lab "Spende", Aof VI, pp. 275—277.

- (102) ウィゲル證文の違約罰文言に、大軍または大衆、すなわちモンゴルの大カーンへの科料が記載される例がある。カンの個人名の出る例は他にないが、字面より太宗オシタイのことと信じた。参考：梅村坦 一九七七、〇一三—〇一四頁。Clark 1975, pp. 17—20.

- (103) この用語とくじは、ノールと P. Aalto (1957, pp. 17—22) の論考がある。翻譯經典には、佛陀のサウチートとシト Slt. arhan と對應し、また舍利弗 (Śāriputra) のサウチートに用いられた例が指摘される (Müller 1920, p. 88)。ハヤナル證文では雅號ならし恭へ呼ぶ掛たる言葉とみづる (p. 19)。ヒューズは "Titel des Abts" とする (1981c, p. 239)。梅村 一九七七、〇一八頁參照。

- (104) arayadana~aryadana の例は "arayadan sangra[ra]m" (Müller 1908, p. 14 (5)); "qisil arayan" (T I D 523 v. 3; Zieme, 1976, p. 769) など、一般寺院の "vxar sangram" (Müller, 1915, p. 23); "xavxasi vxar" (Müller 1910, p. 88; 73; cf. Ligeti 1961, p. 236); "puking si vxar" [普慶寺] (Kara-Zieme 1976, p. 66n) と對する。敦煌書の「蘭若」とあたるものがある。

- (105) Cf. Arslan Bilgä Tngri ilig Könčük İdug-qut (Zieme, 1985, p. 156 (Text 40, 30); KöI Bilgä Tngri ilig (Müller, 1915, p. 6, 3) etc.

- (106) 荻原雲來編『漢譯對照梵和大辭典增補改訂版』講談社 一九七九、一三八六。なお山田近刊資料 TM 88 (6) に "s[aj](ay)q sāli ngisdivri bolu(p)" (Salayq Šāli 'a sangisdivri なる) など。同資料一〇七頁をヒューズ氏に用いて "[m] ügrünč qya-sāli-tär-kä ayidib bitidm." ([Ich] ügrünč Qya, habe (das Schriftstück) nach Diklat durch die Sālis geschrieben.) など。ハチキスとサリ の社會的地位の判斷に特に重要なものとされる (Zieme 1981c, p. 251)。

- (107) Kara-Zieme (1976, p. 66: B101f.) の版本断片 (Avalokiteśvara Saḍhana の板刻謄記) T I u (TU 4124) に「癸酉歲(一三三三)年第五月十五(日)に "biz puking si vxar-lyr šilavandi-lar" (なほ普慶寺の šilavanti たち) の儀軌とて修行した。思慮あるものとなくあめ」など (cf. Zieme 1981d, pp. 397—398; Some Remarks on Uigur Block Prints 京都大學文學部 第一回内陸アジア研究例會講演 一九八〇、六二二)。大都の普慶寺は元朝皇室の信仰篤へ、『元史』にみえる。(卷二五、一三五一。卷二七、一六左四。卷二八、一四右二。卷二九、一一右一〇、一六右一〇。卷三三、四左三三)。なお、普慶寺には律師がいたことがわかる(『佛祖歷代通載』卷三六、六九右)。あるは、šilavanti は律師にあたる可能性はあるまいか。

ウィグル文獻で *silavanti* を稱したものは、第五文書の *Vapso*, *Toyin*, *Qutadmiš Apa*, *Nomdaš*, *Bryançor* のほか、第三文書の *Tornaq Silavanti*, 第四文書の *Bay Yäkä Šila*, *Taylidu Šila* (第三文書) *Činto Šila* (第一文書) *Tirso Šila*, *Kingdsun Šila* (第四文書) *Toyin Quli Šila*, *Kamtsuin Šila* (第四文書) 註(8)参照、*Misir Šila* (サートマ、關係文書の代書人、賣主: *Zieme 1980a* (3, 10; 6, 9) 山田 一九九六(一〇一一)) *Bodi-tuvača Šila*, *Buiso Šilavanti* (*Zieme 1985*, p. 164, 165 (46, 1)), *Šingsun Šila* (*Zieme 1985* p. 177 (49, 88)) などがある。 *šila* は *silavanti* の略稱とされる。また、ヤコリク壁書 (*Le Coq, Chotscho*, *Tafel 21*) の “*šila vände*” も留意される。

- (108) この第五文書(五)の文面は「サートマの蘭茶處に住める *šilavanti-lar-ning kiciğ-lar-i šäli-lar-i* (*šilavanti* なる *kiciğ* (侍者、徒弟) たち *šäli* たち)」、衆徒から(を)國民から(を)勞役に引き出さなう、われらはおぼしめたもうた」である。この *šäli* は *šilavanti* の下位にある *kiciğ* と同列である。サートマ氏はこの錯綜した *šäli* (*SLY: sal/sali/säli/šäli*) 問題について、サートマ氏の解釋を簡條書とすると、次のようであろう。
- (一) 最低位の僧階の *šäli* は、接辭の形からウィグル口蓋音の *šäli* である。(二) 人名を構成する語形は *šäli* と二點記號を持つことから *šäli* または *šäli* である。(三) *Tikhonov* の *Skt. sai* (多分 *śālin*) 起源説も棄てがた。(四) 元史料の漢字名の *šäli* (薩理など) は一應切り離して考える。

これに對して、「閼梨」起源説を提出したハミルトン氏(一九八四)は、人名の構成部分と稱號ともに *šäli* の語形で、ウィグル人の間に高位の僧稱號として使われたことを示唆する。なお、サートマ氏は、*sangisdvri šäli* (第五文書、上記本文(六)のハ註(106)参照)の註釋で、*sangisdvri* に関する貴重な資料を見つけた。 “*ol sangram-däki sangisdvri šä acari*” (その僧院の *Sangisdvri* 師 阿闍梨) [*T II S 91* (U 4696)], “*uluvi sanggistri toyin ...*” (その長老 *sanggistri* 僧) [*T II S 89c* (U 1800) r8-9] 又 *TM 88* (U 5280) など。 *TM 88* 資料は、山田氏資料の土地賣渡契約書の断片で、賣主 *Savici Tuduŋg*, 賣主 *Salayq Šäli* はかの *šäli* たち、*Ögrünç Qya* が代書人である。

“(b) *šing* *s[ä](ay)q (š)äli sngisdvri bolu(p) kim ki(m)* *qilmasun-lar*” (その *šäli* の *Salayq Šäli* が *sangisdvri* たち、誰彼 [の係争] したならん) (五一七) とある。また、*Tekin* 刊行の *Maitrismit* 書寫體語 (1980, 1 Teil p. 260: 219v4—6) の “*ingri klapatri kši acari baslap qirg šäli-lär bkēnqa yrlqanışta*” (*Ingri Klapatri* 師 阿闍梨を始めたる四十(人)の *šäli* たちが安居にめられたとき) とある。以上の資料と「住持」證書とを勘案してみると、寺院で安居(修行)するものを *šäli* と呼んでいる。その上座(長老)が *sangisdvri* (*Skt. sarpaśthavira*) *šäli* と呼ばれたと考えよう。よく知られる。よくかく安居(修行)の道場にある者が *šäli* と稱されつつたのである。

- (100) 日本書紀の *tura turru bitig* の發音と *つらぶ*、*ハ*、*ー*、*ビ* の活用 (1981c, pp. 238—239, 254) を參照せよ。
- (101) 『秘書藏文集』 丁 卷六 二二八頁。
- (111) A. von Gabain, Ein chinesisch-ugurischer Blockdruck, *Tractata Altaica* (Festschrift Sinor), Wiesbaden 1976, pp. 203—210.
- (121) H. Franke, A Sino-Uighur Family Portrait: Notes on a Woodcut from Turfan, *The Canada-Mongolia Review*, Vol. 4—1 (1978), pp. 33—40.
- 引用文獻
- [AGr]: A. von Gabain 1974, *Altürkische Grammatik*, 3. Auflage, Wiesbaden.
- [ED]: G. Clauson 1972, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford.
- [DTs]: Akademija Nauk SSSR 1969, *Drevnetjurkiskij slovar'*, Leningrad.
- [ETs]: R. R. Arat 1965, *Eski Türk Şiiri*, Ankara.
- [PDP]: S. E. Malov 1951, *Pamyatniki drevnetjurkskoj pis'mennosti*, Moskva-Leningrad.
- [SEDTF, Faks]: G. Hazai; P. Zimme 1981, *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung*, Faksimiles Bd. 4 Leipzig.
- [URD]: S. E. Malov 1932, Ujurskie rukopisnye dokumenty ekspeditsii S. F. O'denburga, *Zapiski Instituta Vostočnok*
- vedenija Akademii Nauk SSSR* 1, pp. 129—149.
- [USp]: W. Radloff 1928, *Uigurische Sprachdenkmäler*, Materialien nach dem Tode des Verfassers mit Ergänzungen von S. Malov herausgegeben, Leningrad.
- [UTS]: A. Caferoğlu 1968, *Eski Uygur Türkçesi sözlüğü*, İstanbul.
- P. Aalto 1967, *Ayayqa tegimliĝ, Studia Altaica*, Festschrift für Nikolaus Poppe, Wiesbaden, pp. 17—22.
- B. S. Adams 1968, Notes on a Uyğur Text. TDAYB '68, pp. 53—57.
- R. R. Arat 1964, *Eski Türk hukuk vesikalari*, JSFOu 65—1 pp. 1—77.
- L. V. Clark 1975, Introduction to the Uyghur Civil Documents of East Turkestan (3th—14th cc.), Bloomington (Dissertation).
- 江上波夫 一九三八「(譯) ヲロフ、オルデンブルグ探検の回鶻文書」『蒙古學』三「一九九—一六〇頁」
- 馬家昇 一九五三「回鶻文寫本『菩薩大唐三藏法師傳』研究報告」『蒙古學專刊』丙種第一號 一—二六頁。
- Фэн Цзя-шэн; Э. Тенишев 1960, Три новых Уйгурских документа из Турфана, *Problemy vostočnokvedenija* '60—3, pp. 141—149.
- 馬家昇 一九六〇「回鶻文契約三種」『文物』一九六〇—六「三三—三三頁」
- A. von Gabain 1954, Texte in Brämnischrift, TTT VIII,

ADAW '52-7.

A. von Gabain 1961, Das uigurische Königreich von Chotscho, SDAW, 1961-5.

耿世民 一九七八「兩件回鶻文契約的考釋」『中央民族學院學報』一九七八一二、四三—四九頁。

耿世民 一九八一「兩件回鶻文賣買奴隸文書的考釋」『民族語文論集』二〇二—二一九頁。

J. Hamilton 1984, Les titres sāli et tutung en ouïgour, JA 272, pp. 425-437.

羽田亨 一九二五「回鶻譯本安惠の俱舍論實義疏」(白鳥博士還曆記念東洋史論叢)『羽田博士史學論文集』下卷(一九五八)一四八—一八二頁。

G. Hazai 1975, Fragmente eines uigurischen Blockdruck-Falbuches, AoF 3, pp. 91-108.

黃文範 一九五四「吐魯番考古記」(考古學專刊丁種第五號)・科學出版社(再刊一九五八)。

G. Kara; P. Zieme 1976, Fragmente tantitischer Werke in uigurischer Übersetzung. BTT VII.

G. Kara; P. Zieme 1977, Die uigurischen Übersetzungen des Guruyogas <Tiefer Weg> von Sa-skya Pandita, BTT VIII.

百濟康義 一九八五「Prajñāśrī ンヤンゲル語 Uṣāpāripiprecha」『日本佛教學會年報』五〇、六七—八九頁。

百濟康義・小田壽典 一九八三「ウィグル譯八十華嚴殘簡、附安藏と四十華嚴 西域出土佛典の研究(指定研究 主任 井

ノ口泰淳)」『佛教文化研究所紀要』(龍谷大學)二二、一七六一—二〇五頁。

L. Ligeti 1961, Sur quelques transcriptions sino-ouïgoures des Yuan, UAJ 33, pp. 235-244.

L. Ligeti 1973, À propos d'un document ouïgour de l'époque mongole, AOH 27-1, pp. 1-18.

護雅夫 一九六三「元代ウィグル文土地賣買文書一通」『岩井博士古希記念典籍論集』七二—七二七頁。

森安孝夫 一九八三「元代ウィグル佛教徒の一書簡」『内陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社、二〇九—二二一頁。

森安孝夫 一九八五「チベット文字で書かれたウィグル文佛教教理問答(P. t. 1292)の研究」『大阪大學文學部紀要』二五、一—八五頁。

F. W. K. Müller 1908, Uigurica, (I), APAW '08-2 (SEDTF I).

F. W. K. Müller 1910, Uigurica, II, APAW '10-3 (SEDTF I).

F. W. K. Müller 1915, Zwei Pfahlschriften aus den Turfan-funden. APAW '15-3.

F. W. K. Müller 1920, Uigurica, III, APAW '20-2 (SEDTF I).

念常集(元)『佛祖歷代通載』臺北 新文豐出版。

小田壽典 一九八五「On the Uigur Colophon of the Buddhāvataṃsakasūtra in Forty-Volumes. 『豐橋短期大學研究紀

要』二一 一一一—一二七頁。

G. J. Ramstedt 1940, Four Uigurian Documents. Mannerheim,

Across Asia from West to East in 1906—1908, II. Helsinki.

K. Röhborn 1971, Eine uigurische Totenmesse. BTT II.

庄垣内正弘 一九七六, 「ウイグル語寫本『觀音經相應』—觀音

經に關する 'avadāna'—」『東洋學報』五八一—二一〇—

—〇三七頁。

庄垣内正弘 一九八二, 「ウイグル語、ウイグル語文獻の研究—

『觀音經に相應し三篇の Avadāna』及び『阿含經』につ

いて』『神戸市外國語大學研究叢書』第二冊。

程鉅夫(元)『程雪樓文集』(元代珍本文集叢刊)上、臺北 一

九七〇。

S. Tekin 1980, *Maitrisim it nom bitig*. BTT IX, 2 Vols.

捷尼舍夫・馮家昇 一九五八, 「回鶻文煥通(善斌)賣身契三種

附控訴主人書」『考古學報』一九五八一(二〇) 一〇九

—一二〇頁。

梅村垣 一九七七a, 「遼約對文書のあるウイグル文書」『東洋

學報』五八一—三〇四—四〇四頁。

梅村垣 一九七七a, 「十三世紀ウイグルスタンへの公權力」『東

洋學報』五九一—二〇一—〇三三頁。

I. Wanke 1978, Eine buddhistische Lehnsschrift über das

Bekennen der Sünden. Fragmente der uigurischen Ver-

sion des Cibeidaocha AW DDR [Dissertation].

山田信夫 一九六五, 「ウイグル文僧借契約書の書式」『大阪大

學文學部紀要』一一, 八九—一二六頁。

N. Yamada 1967, Uighur Documents of Sale and Loan

Contracts Brought by Expedition. MRDTB 23 (1964),

pp. 71—118.

山田信夫 一九六九, 「回鶻文煥通(善斌)賣身契三種」『東洋

史研究』二七—二七九—一〇四頁。

山田信夫 一九七二a, 「ウイグル文奴婢文書及び養子文書」『大

阪大學文學部紀要』一六, 一六—二二六頁。

山田信夫 一九七二b, 「ウイグル文人質文書」『山本博士還曆

記念東洋史論叢』山川出版社, 四九五—五〇八頁。

山田信夫 一九七五, 「ボルシッシュ文書」『松田博士古希記念

論集: 東西文化交流史』雄山閣, 四二—四三三頁。

山田信夫 一九七六, 「カイイムトウ文書のこと」『東洋史研究』

三四—四三三—五七頁。

N. Yamada 1981, An Uighur Document for the Emancipa-

tion of a Slave, Revised. JA 269, pp. 373—383.

P. Zieme 1974, Ein uigurischer Landverkaufsvertrag aus

Murtug, Aof 1, pp. 295—308.

P. Zieme 1975, Zur buddhistischen Stabreimdichtung der alten

Uiguren, AOH 29—2 pp. 187—212.

P. Zieme 1976, Singgo Sali Tutung, Übersetzer buddhistischer

Schriften ins Uigurisch, TA, pp. 767—775.

P. Zieme 1977, Drei neue uigurische Sklavendokumente, Aof

5, pp. 145—170.

P. Zieme 1978, Materialien zum uigurischen Onomasticon, I

TDAYB 77, pp. 71—86.

- P. Zieme: G. Kara 1979, *Ein uigurisches Totenbuch*, Wiesbaden.
- P. Zieme 1980a, Uigurische Pacht Dokumente, AoF 7, pp. 197—245.
- P. Zieme 1980b, Ein uigurischen Leihkontrakt über Weizen. AoF 7, pp. 273—275.
- P. Zieme 1981a, Materialien zum uigurischen Onomasticon,
- II. TDAYB 78—79, pp. 81—94.
- P. Zieme 1981c, Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster, AoF 8, pp. 237—263.
- P. Zieme 1981d, Bemerkungen zur Datierung uigurischen Blockdrucke, JA 269, pp. 221—232.
- P. Zieme 1985, Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren, BTT XIII.

ON THE TITLE “TUTUNG” IN UIGUR

ODA Juten

From about the tenth to the fourteenth century, the Uigur were the main members of Buddhist society in the Turfan basin, Eastern Turkestan. *Tutung* or *dutong* 都統, which was introduced from China, became a title for Uigur monks of Buddhism and was respected as an honorable name for holy administrators who took the lead of monks and nuns. Later the title was also described as *dutong* 都通 in some Chinese sources. It seems that the Uigur also showed respect to Chinese monks around them. As a matter of fact, the Uigur monks with the title were the translators of Uigur-Turkish and Chinese scriptures of Buddhism, the composers or the compilers of Buddhist poems. Some of them were not only taught by master monks and inherited the traditions of Buddhist family, but were high-ranked monks with a wife and children. It is impossible, at least in Mongol-Yuan society, to ignore the presence of married monks. The personal relationships to Atay Tutung, which were recorded in the civil documents, make it possible to study an aspect of the Uigur Buddhist society of the later thirteenth century. Some official and private documents help us to study how Titso, the son of Qiytso Tutung, came to be venerated as an abbot of Murutluq Monastery. The monastery seems to have been a training hall under the administration of West Uigur State.

BUDDHISM AND KINGS

SADAKATA Akira

Asoka, Kaniska, and many other kings are described in the Buddhist scriptures as most ardent believers in Buddhism. But kings in general show themselves, in their own votive inscriptions, as more sober, rather realistic politicians. Of these two kinds of documents, we may be able